

# 小規模地方私立大学の挑戦

～地域共創・未来共創の大学をめざして～



桜井 国俊

(沖縄大学学長)

## 小さな大学の大きな挑戦

沖縄大学は、日本の最南端に位置する小さな私立大学である。創立は、私大としては沖縄で最も古く一九五八年であり、今年、創立五〇周年を迎える。収容定員は二学部四学科で二三二〇名、大学院一研究科(修士課程)で二〇名である。

創立五〇周年を迎えるにあたり、沖縄大学では五〇年史を取りまとめた。表題は「小さな大学の大きな挑戦」である。文字通り「波乱万丈」の歴史を歩んできた沖縄大学も、五〇周年という節目の年になって、ようやく初めての自校史をまとめることができる段階に達した。できるだけ多くの読者に手にとってもらうため、高校生にも読みやすいように執筆し、市販本として全国の書店で販売する。あまり例がないことであろう。

このことにも表れているように沖縄大学は、一貫してユニークさを誇り、ユニークさを追求してきた。沖縄の本土復帰時には、日本の大学設置基準に満たないとして認可が得られず(琉球大学をはじめ、沖縄の大学は

すべて本土の大学設置基準に満たなかった)、翌年再認可を得て危うく存続するという稀有の歴史も有しているのである。大学存続のために、学生・教職員が文部省(当時)前に座り込み、学生募集で学生が県内高校を訪ねて回るなどした。日本広しと言えどもこんな大学は他にはあるまい。

「大学冬の時代」は、小規模地方私立大学にとって厳しい時代だといわれ、入学定員割れの大学も少なくないと伝えられる。そのような中で沖縄大学が、なんとか入学定員を維持し、財政状況も日本私立学校振興・共済事業団の経営分析の指標でA1(超優良)の水準を満たし、二〇〇七年度には文部科学省が財政支援の対象とするGP、すなわち他大学でも参考になる「優れた教育活動」(Good Practice)などの四つの大学教育支援プログラムに同時に採択される中で五〇周年を迎えられたのは、正直、幸運の一語に尽きる。個性を追求する全国の小規模地方私立大学の皆さんに多少なりとも参考になればとの思いで、これからも続く「小さな大学の大きな挑戦」について以下に報告する。

## 地域と共に生きる大学

復帰前の民主化闘争、復帰時の存続闘争、存続後の大学の将来への懸念から生じた入学者の減少、赤字の累積、教職員給与の遅配欠配、そして身売り話まで出た大学移転問題など、長く困難な時期が続いた。そうした時期を経て、私立大学としての建学の理念をようやく打ち出すことができたのは、創立二〇周年の一九七八年ごろのことであった。「地域に根ざし、地域と共に生きる、開かれた大学」、これが新生沖縄大学が理念として打ち出したものであった。「地域に根ざす大学」というキャッチフレーズは、今日でこそ珍しくない。しかし三〇年前には、他に見られぬものであった。大学経営のプロは一人もいなかった。逆に言えば教職員すべてが経営者であった。自力更生・自主管理という合言葉の下に、どん底からの模索と挑戦がはじまったのである。

新生沖縄大学による具体的な大学教育改革は、入試制度の改革から始まった。「学んだ学力、身につけた知識の量よりも、学ぶ意欲を」というのがその基本方針であった。また、地域に根ざす大学としてカリキュラム

を見直し、沖縄関係科目群の設置を行った。学生たちに、自らが生まれ育った地域について体系的学習の機会を与えようというのがその趣旨であった。四年間一貫ゼミナール体制を確立し、答案・レポートの返却運動なども行われた。今日では、単位互換はある種の流行であるが、沖縄大学は、全国ではじめて他大学との単位互換制度を確立した。沖縄は、歴史的にも文化的にも、さらには自然環境の上でも、日本の中でもっとも独自の強い地域である。そしてこの独自性は、これを相対化する視点に立つとき、より明確に認識されるであろうというのが、制度確立のねらいであった。この制度は、沖縄大学を日本の地域的文化的多様性を相互確認する教育的拠点に発展させ、大学の活性化に大いに貢献した。

また沖縄大学では、地域における生涯教育の拠点として土曜教養講座を月二回の頻度で開催してすでに三〇年になる。沖縄は島嶼県であることから、「大学を地域へ」との考えに基づき、琉球弧縦断移動市民大学を開始したのも三〇年前であった。一九八〇年代に一〇年間にわたって開催した「沖縄戦と基地問題を考える沖縄セミナー」には、本土の高校教師が多数参加し、平和教育を中心としたその後の高校生の沖縄への修学旅行増へとつながっていった。

#### 今も続く模索と挑戦

沖縄大学は、県都那覇市に立地する大学である。那覇市を含めた地域とは、長年にわたる土曜教養講座や移動市民大学、さらに沖縄セミナーなどの協力実績があるが、二二世紀に入って沖縄大学は「地域共創」に向け地域社会との連携の更なる強化に乗り出した。まず「福祉」「商店街の活性化」「緑化」をテーマに那覇市と協働のまちづくりを始めた。また二一世紀は環境の世紀であるとの自覚にもとづき、環境についての知識が深く意識の高い地球市民として学生を育成することを目標に、二〇〇一年一月にエコキャンパス宣言を行い、二〇〇二年五月にISO14001の認証を取得した。「エコキャンパスからエコシティへ」とのスローガンのもと、キャンパスのエコ化の経験に基づいて地域のエコ化に取り組む様々な活動を展開しており、この取り組みは、二〇

〇七年度の現代G Pで採択されることとなった。

この他にも、地域の小・中・高校生への研究支援、「泡盛講座」や「お菓子講座」など社会人の学び直しニーズに対応した寄附講座の開設など、沖縄大学は地域の変化する教育ニーズを先取りしつつ様々な模索と挑戦を続けている。そうした中で沖縄大学が、現在、目指しているものは、学生が主役の大学づくりである。二〇〇五年から、創立記念日の六月一〇日には「沖縄大学は私が変わる」という学生中心の大討論集会を毎年開催し、学生の大学改革提案を学生が選び、その実施を大学が財政支援している。今年度から学部教育に義務化されたFDについても、学生の持つ可能性をいかに引き出すかを主眼に進めている。

#### 地域共創・未来共創の大学をめざして

五〇周年を機に沖縄大学は、「地域共創・未来共創の大学へ」とその基本理念を発展させる。大学が根ざす地域とのかかわりを、より積極的に対等なものとしていくためである。これに対応して、沖縄大学が育成をめざす学生像も、その中心に「共創力の豊かな人間」を据えることとした。「共創力の豊かな人間」とは、人の共感を信頼し、互いの力を持ち寄ってより良い社会を共に創っていく力のある人間である。「競争力から共創力へ」、このスローガンのもと沖縄大学は、学生たちが互いに信頼し、助け合い、教えあい、育ちあう環境を整備し、対話力・共創力・実践力のある人間の育成に努めているこうとしている。五〇周年を記念して、現在、新館ビルの建設などキャンパスの整備を行っているが、そこでの基本コンセプトは学生の共創力育成である。

「大学冬の時代」と言われるが、今、危機に直面しているのは大学だけではない。時代の趨勢は、沖縄大学がその中で共に生きてきた沖縄社会にとっても、世界にとっても楽観を許さないものがある。沖縄大学は、そうした危機の時代を、自立と平和を求める個性的沖縄社会と共に乗り切り、新しい歴史を切り拓いていきたいと思う。